

☆聖家族(12月27日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (創世記 15 章 1-6、21 章 1-3 節)

これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

アブラムは尋ねた。

「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」

アブラムは言葉をついだ。

「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

見よ、主の言葉があった。

その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

主は彼を外に連れ出して言われた。

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。

「あなたの子孫はこのようになる。」

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

主は、約束されたとおりにサラを顧み、さきに語られたとおりにサラのために行われたので、彼女は身ごもり、年老いたアブラハムとの間に男の子を産んだ。それは、神が約束されていた時期であった。アブラハムは、サラが産んだ自分の子をイサクと名付けた。

第二朗読 (ヘブライ人の手紙 11 章 8、11-12、17-19 節)

愛する者よ、信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。

福音朗読（ルカによる福音書 2章 22-40節）

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。

シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。— あなた自身も剣で心を刺し貫かれます — 多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、

夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

今日は聖家族の祝日です。降誕祭の喜びの日のうちに迎える聖家族の日にはそれなりの意味があるようです。それは人となられた神が家族を作り、その中で成長されたということです。父母のコミュニケーションの中でイエスは人としての成長を遂げられたのです。父母の愛情を感じその感性を受け止めながら少しずつ、生き方を学ばれたのです。きっと病気にもかかったでしょうし、母マリアの看病を感謝をもって感じたことでしょう。父ヨセフの働く姿を見て学び、働く意味、生きていく厳しさを感じられたことでしょう。家族環境が大きく変わっていく現代にあって、今なお家族の意味は必要とされていると思います。今日のご自分の家族を思いながらより良い家族を作り上げていく恵みを祈り求めましょう。同時に、家族が壊れてしまった方々、家族から見放されてしまった方々、家族の外で生きていかなければならなくなった子どもたちに神がその愛をより多く注ぎ力づけてくださるよう祈りましょう。

第一朗読（創世記 15 章 1-6、21 章 1-3 節）

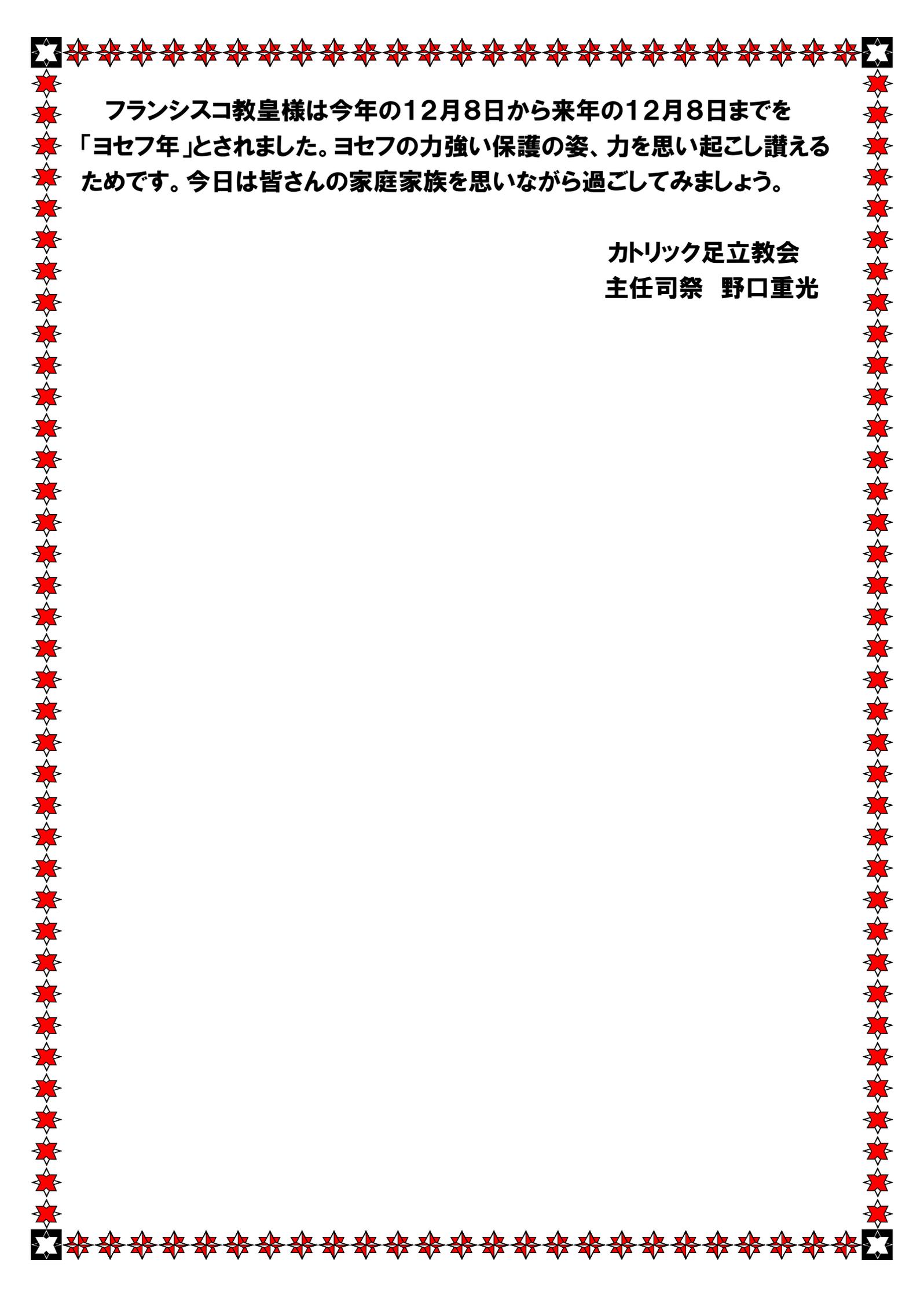
ここでは神を信じて生きていくことの大事さが描かれています。子どもがなかったアブラムに神は子子々孫々の繁栄を約束されます。しかしアブラムには子はなく二人とも年を取っていたのですが、それでもアブラムは神を信じて旅立ちます。そのアブラムに神はサラの懐妊を約束され祝福されたのです。そのためにアブラハムは信仰の父と称えられるようになったのです。希望のない時にも彼は信じたのでした。

第二朗読（ヘブライ人の手紙 11章 8、11-12、17-19 節）

手紙のこの箇所は創世記の記述を思い出させます。一人息子を与えられたアブラハムはもう一つの試練が与えられました。息子イサクを生贄として神にささげるように命じられたことです。それでも彼は神を信じ続けたのです。家庭内に起こる様々な出来事の中に神を信じ続けることの大切さが述べられています。神は私たちに善を望んでいらっしゃることを信じ続けることなのです。

福音朗読（ルカによる福音書 2章 22-40 節）

ここではイエスの家族が三人そろって神殿に参内したことが述べられています。清めの期間が終了し、初めて生まれる男の子は主のために聖別される式を行うためだったようです。そこに、信仰心の篤かったシメオンという老人がいて、神をたたえて歌を歌っています。今では教会の祈りの中で夜寝る前の祈りとなっています。また、母マリアに対し、その生涯が苦しみに満ちたものになると予言したのです。祝いの気持ちの中で聞いたご自分の障害の苦しみを聞いたマリアはきっと複雑な気持ちだったでしょう。私たちの家族の中で起こる様々な葛藤は、すでにイエスの母マリアにもあったのです。苦しみを感ずるとき母マリアに力添えを願いましょう。父親のヨセフに関しては聖書は何も述べていませんが、当時の父親としての務めを立派に果たしていたからこそ、特に述べられていないのでしょう。私たちが自分の務めを立派に果たしているときは、何も言われなくても無視されているわけではないのです。現代では、褒めることによって人は成長するといわれています。それも真実だと思います。聖書のこの箇所は三人を描写することに力点が置かれているものではないので、ヨセフの記述は省かれているのでしょう。そして聖書のこのくだりの締めくくりとして、幼子イエスが「ナザレの村でたくましく育ち知恵に満ち、神の恵みに満たされていた」とあります。どのような生活ぶりだったのでしょうか。福音記者ルカに続きを書いてほしかったなと勝手に思ってしまいます。



フランシスコ教皇様は今年の12月8日から来年の12月8日までを「ヨセフ年」とされました。ヨセフの力強い保護の姿、力を思い起こし讃えるためです。今日は皆さんの家庭家族を思いながら過ごしてみましよう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光